アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

アーツ前橋の情報誌

&Arts

アンドアーツ

第19号

TAKE FREE ¥0

特集 「コロナ禍でのアーツ前橋」

自分にできることをする

INTERVIEW
三枝愛 / 住友文彦

アーティストコラム 廣瀬智央

塒〜とぐろとねぐら　撮影／阪中隆文

SPECIAL ISSUE

「コロナ禍でのアーツ前橋」

2020年、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響により、私たちの日常は大きく変化しました。
アーツ前橋は3月5日から約3ヵ月間の臨時休館ののち、6月1日から再開しました。
このコロナ禍にあっても、「自分にできることをする」(※) ために取り組んだ休館中の活動や再開後の様子を、世界や日本の状況と照らし合わせながらご紹介します。

※《自分にできることをする》（2011年）は照屋勇賢が前橋で制作した作品のタイトル。

世界の状況

◀1月6日
中国武漢で原因不明の肺炎
厚労省が注意喚起

◀1月11日
中国で世界最初の死者が発生

◀1月14日
WHO 新型コロナウイルスを確認

◀1月21日
アメリカで初の感染者が発見される

◀1月30日
WHOが「世界的な緊急事態」を宣言する

◀2月8日
新型コロナウイルスによる
死亡者数がSARSの死亡者数を超える

◀3月6日
世界で感染者数が10万人を超える

◀3月8日
世界全体の感染者数が確認された国・地域が100に到達

◀3月11日
WHOが「パンデミック」宣言を行う

◀3月24日
国際オリンピック委員会(IOC)と東京2020組織委員会は、東京2020大会の延期を発表

◀6月8日
世界の感染者、6/6-6/7の24時間で
最多の13万6000人が確認される

◀6月28日
世界で感染者数が1,000万人を超える
アメリカの感染者数は251万人を超え、次いでブラジルが131万人、ロシアが63万人、インドが52万人と続き、上位4カ国の合計が世界全体の約半数を占める

◀6月29日
世界の死者が50万人を超える

◀7月12日
世界の感染者24時間で最多の23万370人

◀7月18日
世界の死者が60万人を超える

日本の状況

2月

◀1月15日
神奈川県で国内1例目の
感染者確認

◀2月3日
乗客の感染が確認されたクルーズ船が横浜港に入港

◀2月13日
国内で初の死者が発生

◀2月21日
国内感染者数が100人を超える

◀2月27日
安倍首相が3月2日から小中高校の
臨時休業を要請

3月

◀3月9日
専門家会議「3条件重なり（3密）避けて」
と呼びかけ

◀3月14日
新型コロナウイルス特別措置法が
成立する

◀3月20日
国内感染者数が
1,000人を超える

◀3月29日
新型コロナウイルスによる
肺炎で志村けんさん死去

4月

◀4月3日
国内感染者数が3,000人を超える

◀4月5日
国内死者数が100人を超える

◀4月7日
埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、
大阪府、兵庫県、福岡県の7都府県に
対し5月6日までの緊急事態宣言が発令された

◀4月16日
全都道府県に対し緊急事態宣言が発令

5月

◀5月3日
国内感染者数が15,000人を超える

◀5月4日
政府、緊急事態宣言を5月31日まで延長することを発表

◀5月14日
政府が全国39県の緊急事態宣言を解除 8都道府県は継続

◀5月20日
夏の全国高校野球　戦後初の中止決定

◀5月21日
政府が兵庫県・大阪府・京都府の3府県の緊急事態宣言を解除

◀5月25日
政府、残る東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・北海道の5都道県に対する緊急事態宣言を解除

6月

◀6月2日
「東京アラート」都民に警戒呼びかけ

◀6月19日
東京など首都圏1都3県や、北海道の
都道府県をまたぐ移動の自粛要請が解除

7月

◀7月7日
国内感染者数が20,000人を超える

◀7月15日
小池知事　臨時会見にて「感染拡大警報を発すべき状況」

◀7月22日
「Go To トラベル」キャンペーン始まる

8月

アーツ前橋の動き

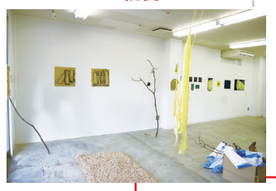
3 月 5 日からの臨時休館により「前橋の美術 2020 トナリのビジュツ」展と関連イベント、そして滞在制作事業に参加している作家のトークが実施できなくなりました。約 3 ヵ月に及ぶ休館の間、私たちは、「前橋の美術 2020」の作品の搬出をいったん保留し、アーツ前橋のガラス面に作品の一部を設置してロールスクリーンを上げるための行為や、オンラインを活用した情報発信を行ってきました。

展示入替期間　2/8～3/15
「前橋の美術2020」展
（3/3会期短縮で終了）

3/5～5/31　アーツ前橋臨時休館

飯沢康輔

三枝愛



アーティストトークはそれぞれ収録にて後日YouTubeで公開されました

3/21.22 地域アートプロジェクト オープンスタジオ 予約制にて公開

5/21 公式ホームページにて「再開のメッセージ」を公開

6/1～7/26　「廣瀬智央 地球はレモンのように青い」展

再開後の様子

左Photo:木暮伸也

8月15日・16日▶
PCR-3(Project COVID-19 Reflect-3)
塒～とぐろとねぐら

PCR-3主催によるパフォーマンス「塒～とぐろとねぐら」がアーツ前橋を会場として上演されました。この公演はアーツ前橋建物の屋内部分と屋外部分を併用した上演であり、パフォーマーだけでなく観客も屋内と屋外から鑑賞する作品となりました。

7/20【アーティストからアーツ前橋への手紙】
今、どんなことを感じ、考えていますか。

これまで前橋で滞在制作を行った国内外のアーティストに、この世界的なパンデミックの状況下でアーティストとして、生活者として何を感じ、考えているのかを手紙としてお送りいただきました。公式ホームページにてご紹介しています。

3/16～18　ガラス面で作品設置作業

県内の新聞社などのメディアでも取り上げられ、立ち止まってガラス面をのぞく人も見かけられました。

3/19～5/13　ガラス面に「前橋の美術2020」の作品の一部を設置

6/1～10/13　「糸の記憶」展

SNS定期発信

アーツ前橋フェイスブックページでは火曜日にアーツ前橋のコレクション紹介とYouTube動画紹介と隔週毎に発信しています

インスタグラム新アカウント開設

4/28 オンラインライブラリ始動

"stay home"と繰り返し呼びかけられた期間でもご自宅でアーツ前橋のコンテンツが楽しめるよう、アーツ前橋公式ホームページにて「オンライン・ライブラリ」を始動しました。アーティストへのインタビューや収蔵品、美術館外で行っている活動を動画やテキスト、写真などによりご紹介しています。

6/1 アーツ前橋再開

最初のお客様にレモンのプレゼント

（住友館長FBより）

7/5 YouTubeにてトーク公開

中止になった2つの対談の収録を行い、
それぞれYouTubeにて公開しました。

廣瀬智央×樋木野衣

廣瀬智央×中村政人

INTERVIEW

いま、コロナ禍の美術館を考えなおす

2020年3月5日に休館、そして6月1日から再開したアーツ前橋で見えたコロナ禍の景色、また未来に新しく開かれた世界はどんな風に目に映ったのでしょう。アーツ前橋主催の「群馬県ゆかりのアーティスト滞在制作事業」で前橋に滞在していた三枝愛さんとアーツ前橋館長・住友文彦さんにお話しを伺いました。

聞き手／Photo:市根井直規

三枝愛　アーティスト

2020年7月17日 収録（リモートにて）

作品を「展示されている時間」の外側へ

—三枝さんは、2月から前橋で滞在制作をされていましたよね。当時はどのような様子でしたか。

アーツ前橋ではイベントの中止に始まり、開催中だった企画展「前橋の美術 2020」も中止が決まりました。3日おきくらいに、めまぐるしく情報が更新されていましたね。暗いニュースが続く中で、住友館長や未来の芽 里親プロジェクト、同時期に前橋で活動していたアーティストと共に、何かできることはないか考えるために、様々な形で対話を重ねていました。

—展示作品のガラス面設置は、三枝さんのアイデアであるそうですね。

前橋滞在中、常設作品である照屋勇賢さんの《静のアリア》を初めて見たのですが、作品で語られる「美術館は閉まりません」という言葉が印象に残っていました。開館以前から美術館の役割とは何かという話し合いが行われ、その蓄積の上にこれまでのアーツ前橋の活動が続いてきたことを思うと、臨時休館に対して何か態度を示すべきではと感じていたんです。でも、新たに作品のようなものを付け加えるのは不自然に思えました。そこで、中止になった展覧会の「搬出」の「保留」を提案しました。

作品には、展示されている時間と、そうでない時間があります。展示室から搬出されてゆく作品を窓際に留め置くことで、鑑賞者にとっては見えない作品の時間を想像するための場として、美術館に関わる人たちにとっては急に終わりを告げられた展覧会をゆっくりと終えるための時間として機能すればいいなと考えました。

出展作家ではなかった私自身はどうしていたかというと、作品を設置する場所で掃除する役割を勝手に担っていました。窓際をほうきで掃きながら、作品たちの移動を待つような。

このとき住友館長がやってきて「暗かったら掃除にならないから」と照明をつけてくださったのですが、その瞬間、虹色の光が目の前の床に現れて。その虹がアーツ前橋の常設作品なのだと気付きました。館長は「（作品は）他にもあるよ」と言い、それまで気づいていなかった常設作品の一つひとつを、館長と確かめて歩きました。

私にとってこの掃除は、見つけた人にだけ開かれるような作品のありようを見つめる時間でもありました。

行き先が見えないときに届く声

—三枝さんは、しいたけの原木やおがくずを使った《庭のほつれ》というインスタレーションを制作されていますよね。制作に至るまでに、どんな原体験があったのでしょうか。

もともと田畑や庭、家、墓などの土地を維持管理する中で選ばれないもの、手放されていくもののことが気になっていたんです。私の実家はしいたけ農家で、栽培用の原木を福島県の阿武隈山地から仕入れていました。2011年の東日本大震災の際に、一帯が放射能に汚染されて、原木の仕入れができなくなり、農家としての仕組みが急に止まってしまいました。

—ご自身をとりまく環境が大きく変わったわけですね。制作のエネルギーはどこから生まれたのでしょうか。

人が何かを忘れていくこと、離れていくことに対して、どのように向き合えるのかを考えたい……そんな思いを震災以降の社会全体で共有できる予感が生まれたからでしょうか。震災自体が作品のテーマだったわけではないのですが、その経験にはある意味背中を押してもらったといえるかもしれません。

大きな流れがある中で個人の声は届きづらいものですが、急に流れが止まったり、行き先が見えなくなったりしたとき、その声が誰かに届くかもしれないな、と。

「分かるようになるまで待つ」ことの大切さ

—まだまだこれからどうなるか分からない現状の中、大切にしている考え方はありますか。

私の活動は、人との関係が絶たれたものを、一時的に美術の中に避難させてみる試みでもあります。社会の中では機能しない、いらないとされているものでも、作品の中で扱うことで判断を保留することができるかもしれません。その過程で別の道が見つかるというか、違う時間の流れがあるというか。

緊急の際、「何が正しいか」は誰にも分かりませんが、どうしたらいいか分からないまま何らかの決断を強いられることは多くあります。しかし、アーティストという立場からすると、答えを迫られたときに「ちょっと待ちませんか」と返すことも選択肢に入れたい。時間はかかりますが、分かるようになるまで待つことは大事だと思います。

—「分かるようになるまで待つ」。そのためのメディアとして、美術館があるのかもしれませんね。

閉館中のアーツ前橋は警備の依頼を一部短縮していたそうですが、今回の搬出の保留によって再開しました。ある日の消灯に立ち会い、その姿を見たときすごく嬉しい気持ちになりました。懐中電灯で見回りをして、電気を消して、鍵を締める。自分たちが何かをすることで、止まっていたものが動き出すこと、誰かが何かをするきっかけになることを実感しました。

私自身、美術や美術館を必要としてきて、ずっと「もらう立場」にいました。今回の経験をきっかけにして、少しでもそれを返すことができるようになるといいなと思っています。

三枝愛　MIEDA Ai

1991年埼玉生まれ、京都拠点。生家が営む原木椎茸栽培を取り巻く環境とその変化を見つめる作品《庭のほつれ》を中心として制作を行う。社会から選ばれないもの、残されないものを残すための手立てとして制作による保存行為を試みている。2019年より捩子ぴじん・島貫泰介と共に『アンティゴネー(仮)』制作に向けた、葬送儀礼・墓跡と大逆事件関連史跡リサーチと実践のプロジェクトを継続中。

住友文彦　アーツ前橋館長

2020年7月15日収録

いま、アートに何ができるのか

—3月上旬、臨時休館を判断するまでの流れをあらためて教えて下さい。

当時は、展覧会「前橋の美術 2020」の会期中で、もともと3月15日まで開催することになっていました。そのころからニュースでたくさんの情報が流れていましたが、実際に展覧会を中止して休館するまでには少し時間がかかりましたね。

そして2月末に国立美術館の休館が決まり、いよいよか、と。アーツ前橋は前橋市の美術館ですから、市が運営する他の施設の動向をチェックしつつ、ついに3月5日に臨時休館の判断となりました。「前橋の美術」という展覧会でしたので、みなさんに見てほしい作品がたくさんあり非常に残念だったのですが……急遽作家の方々に連絡し、臨時休館の旨を伝えました。

—休館していた約3ヵ月の間も、作品をガラス面に設置するなどの取り組みをされていましたよね。どのようなきっかけがあったのでしょうか。

私たちの活動が止まってしまったのは、2011年の東日本大震災以来でした。震災当時はアーティストの照屋勇賢さんが「アーティスト・イン・レジデンス」のために前橋に滞在されていました。照屋さんが制作した作品《自分にできることをする》を市民が共同購入し、地元に残した「未来の芽 里親プロジェクト」を思い出し、いま何ができるのかを皆で考え始めました。

大きな災害や緊急事態が起きたとき、アートは社会に対して何ができるんだろう。また美術館としては、アーティストの方々をサポートする方法も考えたい……。もやもやしているなか、三枝愛さんが提案してくださった「作品を搬出する途中でガラス面沿いに設置する」ための作業を3月16日に開始しました。展覧会でも展示でもなく、日常で出会うものとして作品を見せる方法で、各メディアからも多数取材をいただきました。

異なる他人と関わり、想像するということ

—長期休館を経て、あらためて気づいたことはありますか。

私自身が神奈川県在住なので往来を止めていたのですが、緊急事態宣言が出る前、前橋で地元アーティストたちと話した日がありました。それまで2週間ほど1人で考え込んでいたのですが、自分とは異なる経験や考え方にふれ、大いに発見があったことを覚えています。やはり違う立場の人と話す場は大切だと思いましたね。

もともとアーツ前橋のオープンが東日本大震災の直後だったこともあり、今起きていることは初めてではない、という感覚がありました。「本当に人が困っている時、美術館には何ができるか」。これは震災を経験していなかったら考えていなかったことかもしれません。

—緊急時の美術館の役割は、なかなか伝わりづらい部分だと思います。

ニュースなどで「不要不急」という言葉がよく聞かれましたが、私は「必要／不要」と線を引くことに対して違和感があります。美術館に行くことは不要不急だけれど、ビジネスは必要です……といった線の引き方には、疑問を投げかけなければいけない。なぜなら、それは「この人は自分と同じ」「この人は違う」と壁を作ることになってしまうからです。

美術は「自己表現」や「他の人とは違うことをやること」だと考えられることが多い。ある意味そうではあるけれど、本質的には「異なる人々に対して想像をすること」だと考えています。人に届き、共感される表現は、個人を追求し、さらにそれを超えているわけですから。自分の内面を見つめ、他者への想像力をはたらかせることは、経済やビジネスよりもよほど重要だという見方もできるわけです。

美術館として、アーツ前橋として

—アーツ前橋は、これからの社会とどう関わっていくのでしょうか。

医療、食料、教育、文化、自然などは、一見「美術」よりも大きなカテゴリーに見えますが、美術はすべての分野にリンクしています。どんな業界であっても、その分野の技術的な知識だけがあればいいわけではなく、他人を想像することが必要になります。たとえば、アートを教育や福祉の現場に活かす「表現の森」プロジェクトや、過去に開催した「フードスケープ」という展覧会などもその一つですね。

—アートを社会に開いておくことの意味は、私たちの想像よりも大きいのかもしれません。

再開して最もうれしかったのが、ヘビーユーザーの方々がすぐにたくさん来館してくださったことです。名前は知らないけれど、顔を覚えるほど頻繁に来てくれるみなさんがアーツ前橋に集まって、「最近どうしてましたか」みたいな話をしている。

私自身、そんなみなさんに会えて嬉しいし、来館者同士が再会する場所になったことも嬉しくて。アーツ前橋には職場とも家庭とも違う役割があることを感じました。閉じていたからこそ、開くことの大切さに気づけたというか。

そして、私たちの仕事は人の感性に関わる仕事であると強く感じました。美術館は、「自分と他人の感覚はどう異なり、どう同じなんだろう」、と思いを馳せる経験ができる場所。今回の事態を経て、そんなことをあらためて実感できましたね。

COLUMN アーティストコラム

「カフェ文化 ー コミュニケーションを成熟させるトポス」 廣瀬智央

COVID-19 の影響でしばらくイタリアに戻れていないのだけれど、カフェの香りを嗅ぐたびにイタリアを思い出す今日この頃。イタリアの空港に一歩足を踏み入れて、カフェの香りが漂ってくると、「あぁ～、イタリアに戻ってきたな」という気持ちになる。匂いと町の記憶が深く結びついているからだ。

「一度にたくさんの用事を済ませたければ、しかるべき時間にバールへ行けばすべて済むよ」と、ある小さな田舎町に住む友人のアーティストがよく言っているのだが、まんざら冗談でもないリアルな話だ。イタリアのバールは、さまざまな人々が朝から晩までしきりなしに出入りしているからだ。多くのイタリア人が少なくとも一日に２～３杯のカフェをのみ、３度はバールに足繁く通う。仕事が詰まればカフェでブレイクをとり、リスタートする。必ずお気に入りのマイバールがあり、そこはコミュニケーションのトポスとなる。仕事からプライヴェートの話まで情報を交換し、ときには噂までどんな些細な話題にも事欠かない。

今や誰もが疑わないイタリアの顔の一つがカフェだ。私はどこの街にいても、あの芳ばしいカフェの香りを嗅ぐと、すぐにイタリアを思い浮かべてしまうぐらいだ。とりわけナポリは、カフェ文化を成熟させてきた街である。その始まりは、20世紀初頭に圧力式のエスプレッソ・マシーンが、ナポリで発明されてからだという。スタバ経由で全世界に広がったあのエスプレッソ・マシーンだ。発明の地ナポリは、いまでもイタリアのカフェのメッカであり、ナポリ人はカフェへのこだわりが特に強い。家庭でも一口で終わってしまう一瞬の儀式に、毎日たっぷりと準備の時間をかけて、スプーンと砂糖でカフェを泡立てる。これこそナポリ式の家庭のカフェスタイルだという。

街角のバールには 30 年来の強者の「バリスタ」（カフェを入れる人）が待ち構えている店が多い。彼らは常連の好みをすべて把握しており、どんなに混んでいようが、顔を見ただけで素早く好みのカフェを出してくるのだという。

硬質、軟質すぎない水、深煎りの豆、そしてバリスタの腕がナポリの極上カフェの秘密だ。もしナポリに行ったならば、ナポリ流に小銭を添えて芳ばしいアロマとふわっとしたクリーム上の泡立つカフェ・エスプレッソをたのしもう。

廣瀬智央　HIROSE Satoshi

1963年東京生まれ。現在ミラノと東京を拠点に活動。多摩美術大学卒業後にイタリア政府給費奨学生として渡伊。ポーラアート財団の研究奨学金を得てミラノ・ブレラ美術アカデミーを修了。2008年には、文化庁在外研修員としてニューヨークに滞在。水戸芸術館、広島市現代美術館、イタリアのペッチ現代美術館、ボローニャ近代美術館、オーストラリアのシドニー現代美術館など世界各地で展覧会多数参加。今年アーツ前橋でも個展「地球はレモンのように青い」を開催した。

視点を変えれば この街はワンダーランド！

前橋まちなかウォッチング

千代田町3丁目

読めそうで読めないカタカナ

文学館周辺いたるところに居るネコ。表情が絶妙

明るくて楽しい人が書いたんだろうな～

吸い込まれるような魅力を感じる街のスキマ

りりしく未来を見据える朔太郎像と、それを真似するかのような子どもの像

ここのお賽銭は遠投式。一発成功なら大吉！

じつは国道 17 号をくぐる地下道があるんです

大人が3人でトレーニングするための器具があるとは

WORKS 収蔵品紹介

アーツ前橋では、開館以降、継続して作品を収蔵しています。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約800点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここではその中から一点を紹介します。

村上早《いぞん》
MURAKAMI Saki 《*Dependence*》
2018年　リフトグランドエッチング、アクアチント、スピットバイト（多色）

どこか不穏な世界観

村上早は大学院在学中の2015年に「FACE2015損保ジャパン日本興亜美術賞」優秀賞、「第6回山本鼎版画大賞」大賞などを受賞し、注目される気鋭の銅版画家です。銅版を何枚も組み合わせた大きな画面が特徴で、化学薬品で銅板を溶かして凹みを作る腐蝕銅版画のリトグラフ・エッチングという技法を中心に、絵筆で描いた自然な線やかすれの筆跡をそのまま残し、ふき取った跡のような痕跡を重ね合わせながら版を作っています。子どもの絵のようにプリミティブで力強い線で描かれているのは、人間と動物が融合したような生物や、顔のない人物などで、それらはどこか不穏な状況下におかれているように見える。《いぞん》には主要モティーフのひとつである人魚が登場します。村上は人魚を奇形の象徴であるとしながら、その部分を排除しようとすることに強く抵抗感を抱き、不完全な足（魚の部分）を個性として大切に守ろうとしている様子を描いています。

村上早 MURAKAMI Saki（1992 - ）
群馬県生まれ。2011 年武蔵野美術大学入学時から銅版画をはじめる。2014年武蔵野美術大学版画専攻卒業。大学院在学中の2015年に「FACE2015 損保ジャパン日本興亜美術賞」優秀賞、「第6 回山本鼎版画大賞展」大賞、シェル美術賞2015入選などで注目を集める。2016年武蔵野美術大学大学院修了。主な個展に「project N66 村上早」（東京オペラシティ、2016年）、「gone girl 村上早展」（サントミューゼ上田市立美術館、2019 年）がある。

ARTIST IN RESIDENCE 滞在制作アーティストの今

ARTIST
ダンスカンパニーときかたち 主宰
尾花藍子
OBANA Aiko
滞在期間：49日間
2018年2月5日-3月25日

アーツ前橋滞在制作 公演会場の前橋市芸術文化れんが蔵にて、カンパニーメンバー、キャスト、スタッフの集合写真（本人・下段右から3番目）

●これまでの活動

私は「距離を振り付けることで、環境に振付られる身体を可視化し、あわいと気配を追求すること」を活動テーマに、おもに舞台やプロジェクト作品をつくっています。近年、舞台を発表するうちに、観客の身体の反応を触発させる装置を枠組みからつくりたいと考えるようになり、2017年に「ときかたち長期プロジェクト」を始動しました。観客の自宅に１週間ごとに合計３通の手紙が届き、手紙を開く行為から体験がはじまる「旅する過程」を体験する観客公募型公演（2017年）。

アーツ前橋の滞在制作成果として発表されたのは、「ワークショップ」の概念を作品の一部に組み込んだ、観客参加型公演（2018年）。８階建ての空きビルを舞台に不動産 × ディレクター × アーティストの共同制作で枠組みからつくりだすインディペンデントな観客巡回型作品（2019年）。また、アーツ前橋の滞在中に生まれた「公演を別メディアに変換する」プロジェクトの一環として、体験型インスタレーション作品を発表しました（右の写真）。

2019年後半から現在にかけては、３年間を振り返り、次の展開を決める区切りの時期として活動をしています。

●作家の考えていること

どんなときも変わらず、社会（私たち）と個人（一人ひとり）との間（あわい）の距離は、一瞬一瞬の瞬きのように、移り変わっていきます。

その移り変わりの手触りは、かたちあるものにとどめようとすると、砂のように手からこぼれ落ちていくものが多くあると感じています。だからこそ、私は、とどまることを許されない「身体」と、そこに付随する「あわい」や「気配」を追い求め続けてしまうのかもしれません。

その移り変わりの瞬きを感じ続けることが、私たちの存在を鮮やかにする道しるべになるのではないでしょうか。

いつのときも、その一瞬の手触りが表現になったとき、皆さんと共有して感応し合えることが、私にとって、どんな出来事にもかえることができない救いのように感じています。

「第９回 レジデンス・アーティスト，ソウル・アートスペース・グムチョン」招聘／「ART FRONT GALLERY」推薦
作品名《Shape of Time》（韓国）　Photo: Hyun woo Cho

EVENT まちなかイベント情報 2020 Nov. - 2021 Jan.

●前橋文学館スケジュール

「私が出会った表現者たちⅣ おちゃめなアリス 田村セツコ」

10 月 3 日 [土] - 12 月 27 日 [日] 9:00-17:00 前橋文学館 3 階オープンギャラリー

「なぜ踊らないのー生誕 100 年記念 萩原葉子展」

10 月 10 日 [土] - 2021 年 01 月 11 日 [月] 9:00-17:00 前橋文学館 2 階展示室

＊開館・会期等の最新情報は公式 HP をご確認ください。

HP▶https://www.maebashibungakukan.jp/

「前橋初市まつり」

2021 年 1 月 9 日 [土] 10:00-17:00

前橋八幡宮境内（前橋市本町二丁目 9-18）

※新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更になる可能性があります。

メンバーシップ会員募集！

メンバーシップは、アーツ前橋の活動を支援しながらアートをもっと身近に楽しんでいただくためのプログラムです。展覧会入場無料やメンバー向けイベントへのご招待など、さまざまな会員特典があります。

会員証

会員証は 3 種類のデザインより、お好きなカードをお選びいただけます。

A

B

C

A アーツ前橋ロゴマーク

B TokyoDex ≪青い猫のいる街≫(部分) 2013 年

C 南城一夫 ≪描く人≫(部分) 1968 年

＜主な特典＞

●**展覧会：**展覧会が何度でも入場無料です。

●**会　報：**メンバー限定の会報で、アーツ前橋の情報をキャッチできます。

●**展覧会プレビュー：**展覧会プレビューにご招待。いち早く展示をチェックできます。

＊詳しくはアーツ前橋ホームページ「メンバーシップ」ページをご覧ください。

EXHIBITION アーツ前橋 展覧会情報

聴く―共鳴する世界

2020年12月12日[土]ー2021年3月21日[日]

開館時間：10:00～18:00（入場は17:30まで）

休館日：水曜日、年末年始（12/28～1/4）

観覧料：一般500円／学生・65歳以上・団体（10名以上）300円／高校生以下無料

＊障害者手帳をお持ちの方と介護者 1 名および児童扶養手当証書お持ちの方は無料

＊2021年1月9日(土)前橋初市まつりの日は無料

出展作家：アンジェリカ・メシティ、野村誠、恩田晃、小森はるか＋瀬尾夏美、ワン・ホンカイ、スン・テウ

恩田晃
《コラージュ・オン・テープ》1990年ーミクスト・メディア、カセット・テープ

音楽とも演劇とも異なる分野で音（サウンド）を表現媒体とするアーティストは少なくありません。とくに作品が単独で存在するのではなく、周辺環境との関係に依存して存在することに関心を向ける動向において、ジョン・ケージやフルクサスの芸術運動、そして近年はパフォーマンスや映像の作品が増加するにしたがい、音への関心が高まっています。

本展では表現を、話す / 描く / 唄う、といった能動的な行為としてとらえる見方を批判的にとらえ、むしろ「聴く」という受動性を持つ行為に着目することで、ケージ以降の「周辺環境との関係」に焦点をあててみたいと考えています。そのことで、サウンドスケープ的な解釈から、もっと幅広く、フィールドワーク、対話などの表現手法へ対象を広げ、文化人類学、教育、医療、などとも隣接するようなアートの可能性を探っていきます。

ワン・ホンカイ《南風による透聴- 東石と雲林における未来の活動に向けたいくつかの音の記録》2016年（ワークショップ） 撮影： Chen You-Wei

同時開催

「 場所の記憶 ー想起する力 」

2020 年 10 月 22 日 [木]-2021 年 3 月 21 日 [日]

※ 2020 年 12 月 12 日 [土] より一部作品を追加して展示します

開館時間：10:00 ～ 18:00（入場は 17:30 まで）

休館日：水曜日、年末年始（12/28 ～ 1/4） 観覧料：無料

アーツ前橋の所蔵作品をさまざまな切り口で紹介します。住まいや地域と関係する作品や、アーツ前橋での滞在制作作家の作品、2021 年 3 月に 10 年目を迎える東日本大震災と関わる作品を展示します。

※開館・会期等の最新情報は公式 HP をご確認ください。

&Arts ISSUE 19

アンドアーツ 第 19 号

発行：令和2年12月20日 企画・発行：アーツ前橋

デザイン：殿岡 渉（あしか図案）、寺澤由樹 取材・文・写真：市根井直規 表紙写真：阪中隆文

写真提供：福西敏宏 ロゴデザイン：荻原貴男

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016

駅家ノ木馬祭（うまやのもくばまつり）

COMMITTEE FOR WOODEN HORSE FESTIVAL OF UMAYA *Wooden Horse Festival of Umaya*